

オキアイコモチタマクラゲ



△
沖合に生息するオ
キアイコモチタマ
クラゲ

久保田 信

番外編4



タマクラゲの仲間は通常沿岸に生息し、ポリプは生きた巻貝類の貝殻の上で共生生活をしていることが多い。今回紹介するオキアイコモチタマ

クラゲは、外洋性の種類なので「オキアイ」の和名が冠されている。

本種は世界的に広く分布し、インド洋、大西洋、地中海などの熱帯、亜熱帯、温帯域の外洋から発見され、日本では南西諸島や小笠原諸島で採集されている。過去に紀伊半島の沖合でも捕れているが田辺湾ではまだ確認されていない。海流の影響と時期によっては田辺湾にやって来る可能性がある。

特殊な生態的特徴の他に、

形態的には口柄にクラゲ芽を出芽する特徴がある。この性質から「コモチ」の和名を付け加えた。体の中

央にある口柄を1周するようにたくさんクラゲ芽をつくり、コピーを多数遊離して広い海洋で少しでも多くの子孫を残せる母体をつくる手段をとっている。

クラゲ芽は最多で26個が形成される。1個体のクラゲの一生にいったい何個体の分身をつくるのであろうか？ それぞれのクローンも同様に次々と生産するので、それらが食われずに生き残るならばたちまち莫大な数になる。

不思議なことだが、体の同じ場所にクラゲと同時にポリプも出芽している。画像では口柄の右上に触手を生やしたポリプが見える。そのポリプは受精してきてくる子孫とは考えられないので、一種の若返り現象であろう。

母体が健全なまま若いポリプをつくるので、ベニクラゲのように重症を負ったときに若返るのは全く異なっている。この若返ったポリプがその後どのような一生をたどるかは残念ながら不明である。

(京都大学准教授)